

始業式校長講話

2022年度 新しい年度が始まりました。3年目に突入した感染症との闘いは、収束の希望が見えない状況ではありますが、それでもこうやって穏やかな春がやってきており、そして私も皆さんの仲間に入れていただき新しく出発できることにわくわく 胸が躍っております。

令和ももう4年度を迎えました。思い出してみると、令和になった5月、当時の安部首相は、令和という美しい響きと、この言葉が示す意味に「明日への希望とともに大きな花を咲かすことのできるそんな国になりたい」と希望を述べていました。皆さんも良く知っている、「世界に一つだけの花」の歌から着想を得たとのことでしたね。

コロナ禍で活動は制限され、思い描いた高校生活が送れていない 悲観している人もいると思われれます。特に、3年生の皆さんは、スタートの2か月間が休校になり希望をそがれた思いが強かったと思います。この令和の3年間でどんな思いでどんな過ごして方をしてきたのでしょうか。

皆さんは「ガクチカ」という言葉は知っていますか

私は前任校の生徒から聞いて、感心したところです。いわゆる、大学や就職の面接対応で、「学生時代に力を入れたことはなんですか？」にどうこたえるか、学生時代に何に力を入れたかが問われる時代になっている ということです。

昨年末に、近隣大学の広報の方々との懇話会があり、学長をはじめ入試担当者も参加されていましたが、大学でどんな人材を求めるか の質問には、口々に皆さんがおっしゃることがありました。そればやはり「がくちか」でした。

面接の折、高校時代に何を頑張りましたか？の質問に、いまだに、部活のことと、文化祭のことしか答えられない生徒がいる、私たちの聞きたいことはそこではない、部活にしても文化祭だったとしても、そこで自分は何を課題にして、どう努力してどう解決に導いたか ということ、そして一番聞きたいことは、高校時代に向きあった「探究活動で、立てた問と、問と向き合って考えたことだ」ということでした。ここまでの高校生活、皆さんの「がくちか」は何ですか？

私たちはこのコロナ禍を悲観するばかりでなく、できる対策を講じて、そしてこの世相の中でも懸命に生き抜き、前を向くことも重要になってきます。

そして、ネット上に上がっていることをうのみにせず、実際に見て聞いて、本で読んで経験する大切さから、自ら動ける自分、自分に何ができるのかをしっかりと探究する高校生活であってほしいと願っています。

今日の私の挨拶の最後に、皆さんとの出会いにあたり、私のここまで過ごしてきた教師としての信念をお話しします。お勉強ができるとかできないとか、スポーツができるとかできないとか、私は人間の価値をそこで判断してきたことはありません。高校生の行うことは実に創造的で刺激的であり全て応援したいと思っています。しかし絶対に許せないことがあります。それは「ありがとう」の挨拶ができない人と、掃除の時間に逃げる人。礼節をわきまえられない人。すべてに感謝の気持ちを持ちながら日々心を美しく生活することはよりよく生きる未来への第一歩であると考えます。

ここにいる2,3年生、560名。新1年生を合わせると全校で840名。皆さんとたくさんの時間を共有しながらよりより学校づくりのために精一杯尽力したいと考えています。蟻高生のた

った一人がマナーを守れなかったり挨拶ができなかったり、地域から疎まれる行動があれば、それは 840-1=ゼロ になります。それが社会の評価というものです。

そして残念なことにその評価は何年も消えることはありません。

これから何度かお話しすることがありますので、たくさんのことを皆さんと一緒に考えていきたいと思いますが、本日皆さんとの出会いに先立ちお話ししたことを心の片隅に留めてもらえれば嬉しいです。

希望に向かって邁進する2022年度のスタートがきれいを願っております。